

千重子と京都のスマレ

南京工業大学 楊東林

「千重子は廊下からながめたり、幹の根もとから見上げたりして、樹上のすみれの「生命」に打たれる時があれば、「孤獨」がしみて来る時もある。」川端康成は『古都』のまくらでこのように書いています。

川端康成の『古都』は一面の淡く微かな哀愁と寂寥に覆われており、ゆえに独特な魅力を見せて、読者を深く引きつけるのですが、最も印象深いのは冒頭に描かれた小さなスマレ、京都の千重子の呉服店のスマレです。

スマレは多年生宿根植物の一種です。花の大きさは中程度で、紫が濃いものから淡いもの、まれに白いものもあり、喉部は色がやや薄く紫色のしま模様があります。花期は4月中下旬から9月。形状が鉄釘に似ており、その頂部に紫の花を数輪つけることから、中国では「紫花地丁」と呼ばれています。『古都』の中で、春の満開の桜から、冬の飛び舞う細雪まで、四季の風物から季節の節気まで、京都のあらゆる景物が川端康成のペンで輝いていますが、スマレをその最初にして作品全体の感情の基調を打ち立てたことには、深い意味があるのでしょうか？所感を述べるのにまた利用してもよいのでしょうか？答えはもちろんイエスで、疑いの余地もありません。

スマレは中国原産で、朝鮮、日本などにも分布しています。スマレは日光と湿った環境を好み、一般に田畑、荒地、山の斜面の草むら、林の縁、灌木の茂みの中に生え、庭のやや湿った所でよく小群落を形成します。耐陰性と耐寒性があり、土壌を選ばないので、適応性に優れています。小説の中で、主役の千重子が感動の色を浮かべたのも道理です。より含みがあるのは、スマレの花言葉が「誠実」なことで、ロマンチックな愛のエピソードにも事欠きません。これが『古都』の全編の手がかりであり、通奏低音なのではと思います。川端康成は耽美主義者ゆえに、『古都』の作品中でも美が一貫しています。自然の美、人情の美、京都というまちの美、いずれも描写が微に入り細をうがっており、ほんの小さな生き物であっても、独特な味わいで揉み込んでしまいます。『古

都』は心の静けさと美に対する深い悟りを与えてくれますが、私には思わず考えてしまうこともあります。世の中の万物は、かわいさがそれぞれ異なっていて、すべての生物はすべて価値があるのでは。外在する観賞と薬用であれ、あるいは内在する精神、感情の伝達であれ、それぞれがつながっていて、自然の真の意義を放って、人の生活と互いに照り映えているのでは。文学作品、彫刻や絵画の芸術、風景や園芸……かくかくしかじか、生き物を大切に愛護するのは、同じ一因だからで、人と共に銀河の下、紺碧の惑星の中で暮らしているからなのではないでしょうか？

「生命とは自らが目的や価値をもち、それを実現すべくエネルギーを使って働いているものです。進化により目的や価値を自らもつものが生じました。目的や価値があれば、なぜ大切かという問いにも答えられるようになります。『生物多様性はなぜ大切か』という問いも、この観点から答えられるだろうというのが、本書の姿勢です。」本川達雄は『生物多様性』でこのように述べています。彼は生物学と倫理学の二つの角度から、多様性を保護する理由と価値を探求し、そしてサンゴ礁と熱帯雨林の自然環境を例に、多様性が生じる原因、被る恐れのある破壊、そして人と築かれるつながりについて分析しています。よく考えると、『古都』と異曲同工なところがありますよね。一部から全体のことを見ると、生物多様性と生態系の自然の輪は、惑星の贈り物で、人の幸せです。大昔を振り返ると、祖先も自然の力を便りにしていましたよね？経済が拡大し、科学技術が発展した今の時代、まさか自分たちとともに歩んできた、苦楽を共にしてきた親しき自然を忘れてしまえるものでしょうか？

「生物多様性は、〈私〉が永続するという、生物として最も基本となることを実現するために必要なものであり、かつ、〈私〉が豊かな生を生きるためにも真っ当な人間になるためにも必要なものなのです。だから生物多様性を守るべきなのだ——これが本書の結論です。」地球上では190万種類の名前を異にする生物が生息し繁殖しています。もしすべて同種の生物だったら、数がいくら多くても多彩だとは言えません。多様な生物と共に生存しているからこそ、世界は賑やかで多彩なのです。

「白い蝶たちが舞ひ去ったあとまで、千重子は廊下に坐って、もみぢの幹

の上のすみれを見てみた」……i

読んだ図書：『古都』 作者：川端康成

『生物多様性』 作者：本川達雄

参考文献：百度百科（スマレ）